

現役中学教師による教科教育法の授業

鈴木 浩

はじめに

若手の教師への研修について、ここ数年大きな課題と感じ、また実際に関わってもきているが、いろいろと考えさせられることも多く、あらたな方法を開拓しないと教師力の伝承が難しくなってきたと考えている。そんな折り、昨年度から現役の中学教師である私が、神奈川大学で教科教育法の授業を受け持つことになった。前期で指導案を書ける力を、後期は模擬授業を中心に講座を運営して欲しいとのことであつたので、若手の研修の中で感じていることを基に授業を構想することにした。

1. 前期の授業計画 一教材、方法、評価に分ける一

私も学生の頃、あるいは教師に成り立ての頃、授業というものがどのような要素によって構成されているのか、また、それらがどのように相互に影響して授業を良い方向にあるいは悪い方向に働いているのかなど、分析的に考えることができなかつた。今から考えるとそのことが授業づくり、単元づくりに大きな壁となつていた。なんとかして状況を打開したいと思つていた私は、自分の授業実践をさまざまな場面で公開し、批判を受けることで授業改善をしてきた。そうした苦勞をなるべく減らす、いわば授業づくり入門といった形で、学生のうちから理論的に授業構成をとらえ、それを実感として感じることが出来る講座を展開できたら、少しは役に立つ

授業になるだろうと考えた。

ところで、授業を構成する要素にはさまざまなものがあるけれども、ここでは、「教材」と「方法」を軸に採り上げ、さらに単元を構想する上で重要な「評価」を補うような形で講座を形成した。

前期の計画（学生に配布したもの）は下の表のように、教材論3回、方法論3回、評価論3回とした。

これらは全てワークショップ形式で、実際に学生が体験的に学習できるように仕組んだ。下の表にそつて具体的に見ていこう。

<前期の計画 ⑬時間>

① ガイダンス	② 教材論 1	③ 教材論 2	④ 教材論 3
⑤ 方法論 1	⑥ 方法論 2	⑦ 方法論 3	⑧ ディスカッション
⑨ 評価論 1	⑩ 評価論 2	⑪ 評価論 3	⑫ 学生の発表
⑬ まとめ			

(1) 教材論

教材とか学習材とか言われるけれども、抽象論は抜きにして具体的にどのようなものを扱つたのか見ていこう。

ガイダンスの時に取り上げたのは就職情報の

フリーペーパーである。こういう雑誌なども様々な情報が満載されていて工夫次第で教材になると言っただけで示した。

時給、職種、資格、地名、業種、さらにどこにどんな会社があって、どんな仕事を募集していて、そしてどんな資格が要求されているかなど、公民、地理の学習に役立つものである。こうして、子どもにとって身近(フリーペーパーの場合は学生にとって)なもの、手にとって見ることのできるもの、さまざまな見方ができるものがよい教材だということを示した。ただし、このままで中学校や高校の社会科授業の教材として使用できるか、また、ふさわしいかという課題もある。そうしたことを踏まえて、必要があれば教師が加工していくのも大切なことであることを教えた。

次の時間には、次の3つの教材を用意した。

- ①学生にとって身近な地域である六角橋についての資料
- ②大学の偏在と学生の移動の問題が示された数値的データ
- ③神奈川大学の年表

①については、インターネットなどから採取した「六角橋」についての10種類程度の資料を教室に並べ、興味のある資料をその中から学生に選ばせ、別に用意してきた画用紙に、簡単なフリップにまとめさせて黒板に貼らせた。

②については、グループを作って、この資料から読み取れる事実をできるだけたくさんあげてもらった。

③は歴史の教材である。自分の通う大学が、どういう歴史をもっているのか、また、その歩みが社会の動きとどう関連しているのかを知って欲しかった。時間の関係でザツとながめる程度の扱いになってしまったが、自分の学校の歴史を知らないことに学生自身驚いていたようであった。

この3つの教材には共通していることがあ

る。それは、いずれも学生にとって身近な、あるいは関係の深い、または切実な問題であるということである。

ところで、学生に発表をさせる際に、何か教材になる実物を持ってきなさいと言ったら、大学生協で胡椒と唐辛子を買ってきた学生がいた。私は彼を絶賛した。すばらしい! そういう授業が子どもの目が輝くのである。模擬授業の時も含め、学生が用意する教材は、インターネットで入手して、それらを加工せずにそのまま持ってくるものが多い。他では絵画資料や地図、電車の時刻表、書籍の図版、自分が旅行に行った写真などを持ってくる学生もいた。しかし、幾人かは相変わらず市販の資料集のコピーを使用していた。

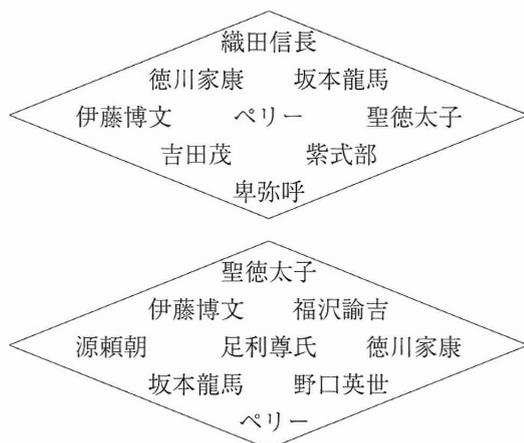
その後、教材そのものをみんなで解き明かしていくような教材や、生徒自身が作成したのも教材になることなどを紹介していった。

(3) 方法

ここでは、学生に様々な学習方法を体験してもらった。ダイヤモンドランキング、KJ法、ブレインストーミング、あるいは付箋紙を使ったり、模写、グラフ作り、また教師による問答法も実演した。方法は、方法自体に魅力があり生徒の意欲をかき立てるものであることが大事である。

この中から、ランキングという方法を用いた場面を紹介しよう。日本史上の人物で、重要だと思える人物をダイヤモンドランキングさせた。まずはじめに日本史上の人物を30人あげさせ、その後ランキングさせた。全てグループで行ったのだが、ここで驚いたことは、日本史上の人物30人がなかなかあげられないという事実である。

ある2つのグループの結果



このランキング結果に私は非常に驚いたし、また、話し合いをしている過程の学生の様子にもすごく興味をもった。グループ討議の際、なぜその人物をランク上位にするかという議論がなかなか深まらない。例えば、庶民の視点に立つとか、平和の視点に立つとか、女性から見てといった規準がたたかわされるのかと期待したが、結果は「お札になっている」「有名」「戦で勝った」というものか、もしくは「小中学校時代にテストにでるから重要だと思った」という思考パターンから抜け出せないものであった。

大学生になっても、自分なりの歴史認識というものがほとんど育っていないのである。これは、学生の責任ではない。小学校から中学・高校とどんな歴史教育が行われてきたのであろうか。学生の感想をいくつか載せてみる。

<学生の感想>

○まずみんなそれぞれ自分がどういった人物が重要と思っているかが分かるのと、それからベスト9をきめたり、また、順位を決める中でグループが一体となって取り組む感じなどがおもしろかった。やっぱり個々で何を重要とするかなど意見が異なるのもわかって良かったです。

○1人では30人も挙げられなかった。はじめてこういう作業をしたので、ねらいがわからなかったけど、おもしろかったです。他人の意見をどう扱うかというのも難しいと感じました。

○30人出すだけでも苦労したが、自分とは異なる多くの意見が聞けて興味深かった。グループでやっても時間がかかるが、個人でやってみてもおもしろいと思った。

学生はとてもおもしろがって、興味をもって取り組んでいたようで、こうした基礎的ともいえる学習を、大学でも取り入れていかないと、思考力も教養も育たないままになってしまうのではないかと感じる。

(4) 評価

中学生の作品（ワークシート）2点を学生に採点させた。その後、学生の下した評価結果を相互に交換させた。敢えて評価規準や観点は示さず、感覚的に2点の生徒作品を10点満点で評価しなさいと指示した。ここでは、先に学生の感想を示すことにする。

<学生の感想>

○評価するためには、評価規準や比較する対象がないと難しいということがわかった。また、生徒をしっかり見ていないと評価できないし、自分自身（教師）の授業のやり方もしっかり振り返らなければいけないということを知った。

○今まで評価される側だったが、いざ人を評価するというになると、どのような規準で評価をしていけばいいのかということが難しかった。また、他の成果物と比較していく中で、最初に見たときの印象と変わってしまうため、評価というのは絶対的なものではないと思った。

○評価があることを忘れていた。どうやって自分の伝えるべきことを伝えるかしか考えていなかった。評価は評価される側を疑うことだと思った。本当にすごいと思っているのか、ただの字数かせぎか、本当に頑張っているのか。努力を評価しようとするか疑っている自分に気づいた。いやだった。

学生の評価は概ね甘く、数値も大きくばらついていた。最大5点の開きがあり、評価力が未熟であることがよくわかる。しかしこの授業で、教師の仕事が一人ひとりの子どもの学力を伸ばすことにあるだけでなく、評価し、ある種の選別を行わざるを得ない、言わば「引き裂かれた存在」でもあることを、少しは感じてもらえたようである。それにしても、学生の感想を読むと、「評価する側に立つ経験」を学生時代にさせることは非常に重要であると感じる。

以上、授業を構成する3つの主要要素に分けてワークショップ形式で学習させることで、学生の「社会の授業」に対するイメージを大きく変えることができたと思う。

2. 後期—模擬授業—

(1) 指導案の作成

後期(教科教育法Ⅱ)では、模擬授業を中心に授業を展開する。そこで、事前に指導案を提出させることにしている(前期で指導案を作る指導をしているのであるから)。

<後期の模擬授業にむけた夏休みの課題>

指導案の項目(必須です)

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|-------------------------|----------------|
| 1 単元名 | 2 授業者 | 3 単元目標 | 4 視点(教材観, 生徒観) |
| 5 単元計画 | 6 本時の目標 | 7 本時の展開(生徒の学習活動, 教師の支援) | |
| 8 評価 | 9 この授業に対する授業者の思い(なぜ, この授業を行いたいのか) | | |

提出日は、後期最初の授業。直接教室に持参。

用紙の指定は特にありません。(A4版 2~3枚がのぞましい)

単元は、地理、歴史、高校、中学を問いません。但し、学習指導要領に示された内容や方法に関わるものにしてください。

私は、指導案づくりでは単元目標がもっとも大切だと思っている。学生は意外にこの部分を書くことはできるようで、さまざまな指導案事例からとってきたりして、まあ、それなりになんらかの形はつく。ところが単元名がよくない。教科書の見出しを書いてきたり、学習指導要領の項目を書いてきたりするものがほとんどである。この事実は非常に象徴的なことである。

つまり、単元という意識が低いのであり、それではせっかく単元目標が示されても、その目標を達成することができない。目標を達成するために、さまざまな学習活動が用意され、それを評価するという行為が一つのまとまりになり、それに名付けるのが単元名であるのだから、「鎌倉時代の政治」といった教科書の見出しや、「中世の日本」といった学習指導要領の中項目では、単元に名付けたことにはならない。「鎌倉時代の政治って平安時代とどのような違いがあるのだろう」とか「中世ってどんな時代?」とかすれば、よい単元名になる。

こうした点を中心に、提出された指導案には朱書きを入れて返却し、最終的には後期のまとめとして修正して提出するように指導する。

(2) 模擬授業の方法と実際

最初から50分の授業を学生に構成させることはかなり難しい。そこで、15分ないし20分の授業をさせることにしている。幸い私の授業は7限目ということで人数が少なく、短く区切れば学生1人あたり2~3回の模擬授業が可能である。

学生に授業をさせると、まず、教卓を離れられない。再三「教卓から離れなさい」「斜めから見たり、後ろから見たり、一人ひとりに話しかけたりしなさい」と指導するのだけれども、どうしても教卓から離れられない。

また、最後のまとめが、結局プリント穴埋めになってしまう。どうして、そんなに穴埋めが好きなのだろうか？ これは真剣に分析してみる必要がある。ひどい場合は

() () ()

と括弧が三つ重なっていて、いったい何を入れればいいのか分からない。そして、学生がここには〇〇をいれてくださいと指示をする。それではそもそもプリントを作成する意味がないのではないか。

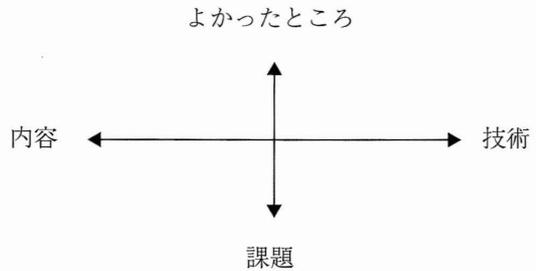
ところで、こうした状況が生まれる背景には、学生の社会科経験のたいへんな貧弱さがある。学生に聞いてみると、これまで100%の学生が講義調の授業か、せいぜいグループで調べて模造紙にまとめる程度の体験しかしていない。

そんな授業体験しかもたない学生が、どうして社会科の教師になろうと思ったのか、むしろ、教師になりたいが先あって、とりあえず社会科っていう学生が多いのではないのか。教科教育法の授業を作り上げる上で、学生のこうした実態をつかんでおく必要がある。

(3) 反省会

模擬授業の後は、必ず反省会を実施した方がよい。学生に評判がよいのは、右上のようなシートを作成して気づいたことを付箋に書いてあてはまる象限に貼っていく書く方法である。この方法は、近頃いろいろな研修で用いられるが、模擬授業のふりかえりにも大変有効である。評価する側の学生にも評価力が育ち、自分の模擬授業にとっても役立っているようである。相互に点数を付けさせて交換させたり、メッセージカードを書かせて渡させるなどの方法を多様に取り入れるとよい。ただ、学生の評価力が低いので、私がコメントすることも大事で、学生の課

題をきちんと伝えることは忘れてはならない。



(4) 模擬授業を終えて

模擬授業を終えて思うことは、「授業」とは非常に多様な技術の集積の上に成り立っているものだということである。学生に、あるポイントについて指導すると、その点については意識するのだが、他の点はおろそかになってしまう。野球の投手をコーチしている時を思い出す（私は中学校で野球部の指導をしている）。腕の振りが良くなったと思うと、今度は下半身のバランスが崩れてしまう。その投手のもっている身体のバランスにあった投球フォームを見つけ出して、それに磨きをかけていくのに、マンツーマンで取り組んで1年も2年もかかる。社会科教師の養成にそうした労力が払えるかということ、それは現実には不可能である。一般論を述べながら、1～2度の模擬授業に簡単なアドバイスをして終わりである。こうした実態を変えることは私たちにはできないのであるから、与えられた環境でいかに有効な「社会科教師づくり」ができるか、みんなで知恵を出し合う必要がある。少なくとも、学生に「教材づくり」や「方法のスキル」を経験させてから、指導案作り→模擬授業というプロセスを踏ませることは、かなりの有効性を実証できたと思う。

3. 今後の課題

まだ、私の大学での授業は始めたばかりであって、いろいろ試行錯誤の段階である。しかし学生の力は確実にアップしたと思う。それは学

生が、具体的に何かを掴むことができたからだ
 と思っている。「わかった」という実感をもつ
 瞬間があったといってもよい。しかし、ここから
 もう一歩先の段階にレベルアップするのは、
 なかなか難しい。私は、浜中社（横浜市立中
 学校教育研究会社会部会）で若手の育成の為の
 研究会も主宰しているのだが、ここでの活動も
 大学での授業と同じ傾向にある。参加している
 若手教師はワークショップをやると楽しく参加
 する。しかし、彼ら自身の授業はプリント穴埋
 めである。また、研修の場が教科内容の専門
 的な部分に入るととたんに興味を失ってしまう。

こうした状態を打破して、学生や若い教師に
 授業力をつけさせるために、どのような工夫が
 必要になるのかこれからもさまざまな場面で
 研究を重ねていこうと思っている。

「教科教育法」は資格科目であり、大学での
 他の授業とは質的に異なるとよいと思ってい
 る。学生に対してどのような力の育成が必要
 なのか、教員同士が意見交換をしていきなが
 ら、より効果的な育成プランを構築していく
 必要があると感じる。資格科目であるだけ
 に、ある種専門学校的な側面もあってよい
 のではないかと思っている。

なお小論は、7限という時間にも関わらず、
 毎回出席し主体的に授業に取り組んでくれた
 学生から学ばせていただいたことを拙い文章
 にしたものであり、引用させていただいた学
 生の感想や成果がなければ成り立つものでは
 ない。ここに記して学生のみなさんに感謝す
 るとともに彼らが教職に就いて活躍するこ
 とを願ってやまない。また、拙文が少し
 でも教員養成課程の授業の在り方について
 話し合うきっかけになってくれればと祈っ
 ている。